

行き過ぎた幼児教育

目白幼稚園
和田 實

幼児教育の必要なところが、稍々知れ渡つて來た云ふことは、誠に悦ばしき現象であるが、是と共に、動もすれば、其効果を過信するものが出來て、幼児教育さへ確かり行れば、其他の教育は少々不完全でも善い、云ふ様な考へを持つものが出來たり、或は少年教育、青年教育でなければ出來ない様な教育事項を幼児教育の中に持つて來よう云ふ氣の早い連中が出來たりすることは、一利一害の伴ふ世の中で、止むを得ないことも知れないが、誠に困つた問題である。幼児教育は基礎教育であつて、決して完成教育ではない。幼児教育は凡ての教育の基礎工作として役立つには相違ないが、決して、教育の本工作としての仕事は何一つ出來るものではない。幼児教育は感化誘導を主とする教育である。自覺教導を主とする學校教育は文化を直接に傳授することに困つて、急速に、教育の目的を達することが出來るが、無意識的に感化誘導する云ふことは、急速に、目的に向つて突進することも出來なければ、嚴格な目的を立て、之を徹底させる云ふ譯にも行かないものである。何故夫れが出來ないか云へば、夫れは、幼児の智能が發達頗る未熟だから云ふより外仕様が、ない。故にこそ、學齡云ふものが、七歳以後に限定されて居る次第である。然るに、此根本的の限度や範圍を考へないで、幼児現在の發達を無視して、小學校や中學校などで、當然、考へられ、施されなければならぬ様なことを幼児

教育に持つて来よう云ふものがありましてら夫れは骨折損の草臥もうけに終るに過ぎぬことではあるまいか。此一つの例として、幼稚園に於ける「情操教育」を擧げたいと思ふ。

抑も、情操云ふものは唯の情緒でもなければ、直觀的初等感情でもない云ふことは心理學を學んだことのある人の誰もが承知して居ることで、高等な理性の發達に伴ふ感情で、情緒生活が、幾多の洗練を経て、始めて、到達するところのものでなければならぬ。従つて、理性の發達の充分でないところの幼児に、直に、情操教育其ものを施さうとするところは、無理な註文云はなければならぬ。幼児教育は文化の傳授には極めて無力である。文化財産の傳授は何として學校の仕事であつて、幼稚園の仕事ではない。此文化財産の傳授に伴つて行はる可き情操教育は到底幼稚園の仕事ではないのである。然るに、過般、大阪市に於ける全國幼稚園關係者大會に於ける文部省の諮問案に對する答申案を見るに、此情操教育が當然幼稚園に於いて、完全に行はる可きものであるとの確信の下に、凡べての計劃が行はれて居るやうである。是は吾人の見るところよりすれば何うしても、行き過ぎた幼児教育云はなければならぬ。斯かる行き過ぎた教育に餘計な浮き身を窶つすよりは、問題の子供の取扱方でも、研究した方が、何の位効果があるか判らぬと思ふ。

文部省も「幼児の情操陶冶に關し保育上特に留意す可き點如何」を諮問して居るところを見るに、幼稚園に於て、當然情操教育を爲す可きものを見て居る様であるが、若し果して然り可すれば、文部省は何か考へ違ひをして居るに、云はなければならぬ。吾人は過般の大會に於いて、大に此點を文部省に質問して然る後に、答案を練る可く心構へして居つたのであるが、文部省は諮問案の出し放しで、何等の説明もせず質問も受けないので、大に期待を逸して仕舞つた。併しながら、文部省諮問案の如何に係らず、幼児將來の情操教育を考慮して、善良なる道德的環境の中に、趣味豊富なる生活を味はせて、其純良なる天真を發揮せしむることは、極めて必要な事であり、大切なことであるから、此點から考へれば答申案其

ものは必ずしも、排斥す可きものではなく、否、大に共鳴する所があるのではあるが、斯る答申案を作つた、其影に隠れた思想、即ち情操教育其のものが、當然、幼稚園の仕事であり幼児教育の責任であるかの様に黙認して居ることに、吾人の不満はあるのである。

人或は云ふ。生活は直接に感情を陶冶することが出来る。文化財産を傳授し得ずとも、文化生活を送ることに因つて、文化的陶冶を受けることが出来る筈である。故に、趣味多き生活の中にあれば趣味を覚え、信仰生活の中にあれば敬虔なる性格は養はるゝことは疑ひない。誠に尤もな次第云はねばならぬ。併しながら、是も決して生活者の智能を無視しては云はれぬことではなからうか。文化生活の中にあつても、其文化生活を理解することの出来ないものに、果して是だけの陶冶効果があるだらうか。吾人は之を否認せざるを得ない。如何に文化生活をさせ信仰生活をさせるにしても、其生活を理解し、其信仰を信仰つけるだけの理解なくして、決して其生活を固定出来るものではない。故に、生活することに因つて、直接に感情の陶冶を計る云ふには限界のあるもので、決して無限の效力を有するものではない。其限界は何處か云へば即ち幼児の智能の程度即ち夫れである。幼児に此理解なくして、決して陶冶的效果のあらう筈はない。尤も、此理解云ふことは何も論理的證明のみ云ふのではなくて、臆ろげに、蓋然的に解る程度で差支ないのであるが、兎に角、理解や洞察なくして、決して出来るものではないので、其理解が深ければ、深い程、明確なれば明確な程、其陶冶的效果は深く且明確に出来る譯である云はねばならぬ。斯様に生活其ものが、直接に感情陶冶に、効果を及ぼすにしても被教育者の智能の發達云ふものが、根柢なる云ふことは、何の道、度外視することは出来ぬものである云すれば、高等な理性的發達に伴ふ可き情操教育が、幼稚園の如き智能の發達の少き時期に於いて、さしたる効果を擧げ得ない云ふことは當然過ぎる程當然なことではあるまいか、勿論、夫れが爲めに情操教育は幼稚園に於て考慮する必要なしなき、極端なことを云ふので

は、決してない。否寧ろ、幼稚園の如き生活即教育の建前を以てする教育の仕事としては情操陶冶の如き相當の考慮を要し、夫れに對する基礎工作の必要あるは當然のこゝではあるが、情操教育其ものが、幼稚園教育の本務であるが如き思想は之を是正しなければなるまい。文學的情操は文學を理解するこゝに因つて出來、美的情操は美を理解するこゝに因つて出來る。眞理もか正義もかに對する情操にしても、眞理の何ものかを理解し、正義の何物であるかを理解して始めて出來るこゝろのものであつて、學術の理解なく、美の理解なく、正義の理解なくして、是等のものに對する情操の出來る譯はない。幼稚園では等のものに對する臆げな理解を與ふるにしても、其は極めて臆ろであつて、殆んど云ふに足らぬ。従つて、幼稚園に於いて養ひ得るこゝろのものとは極めて、臆げなる情操である。寧ろ初等感情や生活感情に過ぎぬ程度のものである。元來、幼兒の生活は主として情緒生活である。日々繰り返さるる感情は情緒の範圍を越ゆるこゝは殆んどない。之を洗練して情操の程度に迄鍛ひ上げるこゝは容易な業ではない。是は主として少年時代青年時代の教育に俟つ可きもので、到底、幼兒教育の能くす可きものでない。幼兒教育は後來の教育の準備工作として、初等美的感情や根柢的道德感情を培養して、後來發達の基礎を作るこゝに専念しなければならぬ。是が、幼稚園教育の使命である。此使命を忘れて、直に、教育の本工作に參與しやうとするのは、少し、早計に失する。幼稚園に於ける觀察は理科の教授では無く、單に、理科的興味を培養するのが目的である様に、幼稚園の唱歌や音樂は、文學や音樂の教授ではなくて、唯、其興味の培養に過ぎぬ。其他製作にしても、舞踊にしても、談話にしても、皆其興味の生活を豊富にし、感情的生活を多面にして、後來の發達活動に自發的基礎を確立させ様云ふのが究極の目的であつて、教育の本工作として決して居るものではない。然るに、文部省の諮問に對する大會の答申案を見るに、情操教育其ものが幼稚園本來の使命であるかの様に見える。思ひ過ぎた教育、行き過ぎた教育云ふ所以である。